

論点

新型コロナ

リモート経済の課題

新型コロナウイルスの感染拡大の影響で外出規制が強まる中、会社に行かずに仕事をするリモートワークが普及してきた。ただ、十分な準備もなく導入に踏み切った企業が多く、サイバー攻撃の危険性や人と会えない孤独感から生じるストレスの問題も指摘されている。急速に浸透しつつあるリモート経済で見えてきた課題とは何か。

八塩 圭子

東洋学園大准教授

やしお・けいこ
1969年生まれ。上智大卒、法政大大学院修了。テレビ東京の元アナウンサーで、現在はフリー。学習院大特別客員教授などを経て現職。著書に「八塩式マーケティング思考術」。



仕事と家庭、線引きが必要

大学の講義の準備や新聞連載の原稿執筆など以前から自宅で作業をしてきた。子育てをしながら在宅で仕事ができるなんてありがたいと思っていたが、出産後成長と共に目が離せなくなり、保育園には仕事に集中できないと分かった。睡眠時間を削ることもあった。

新型コロナウイルスの感染拡大以降、今や多くの母親が在宅勤務になった。仕事でストレスを感じても帰宅して子どもに会ったらばと切り替えて、表に出さないようにしてきた人も多

いと思うが、リモートワークではそれが難しい。子育てながらプライベートで何かをしなから同じ空間で仕事をするという難しさを感じ、味わっていると思う。さらに休校で、子どもに勉強も教えなければいけない。働く母親のフレキシビリティは大きい。私もビジネスタイムである昼間に子どもも家にいる状況はプライベートとビジネスを分けにくいと改めて実感している。休校によるリモートワークで教員や学生らと常にコミュニケーションを取っているが、料理中

も子どもの宿題を見ている時でも何らかの端末を見ることになる。子どもに話しかけられると邪魔されたように感じてしまう。そこで、仕事のストレスを子どもに向けてはいけなく、仕事部屋から家族の共有スペースであるリビングに移動する際は端末を持たないことに決めた。今はスマホ、パソコンがあれば24時間仕事ができちゃうが、仕事の空間と時間を切り離す、自分なりのルールを作ることが大切だ。

夫(スポーツライターの金子達仁氏)も家で仕事をしているが、私が在宅勤務の準備で忙しい、昼食など食事の担当する頻度が増えた。テイクアウトの店を探すなど協力的だ。リモートワーク中の夫が協力的でない場合、子どものために夫婦で何かできるかを考えてはどうか。子どもがいなくても、料理など夫婦で一緒にできることを探すのもいい。

また、新型コロナが収束した後、短時間でリモートワークを利用しやすくなる社会的インフラも必要だ。ベビーシッターや家事を手伝うサポーターの派遣を重要な会議のある2時間だけでも使うといったやり方もある。日本には家のことは主婦がやるという価値観がある。周囲も自分も、「だめな自分」とか言いながら思わずに、掃除や料理など家庭内の仕事をどんどんアウトソーシングできる環境を整えるべきだ。

【聞き手・谷本仁美】